



TITLE:

本学への図書の寄贈つづく

AUTHOR(S):

---

CITATION:

本学への図書の寄贈つづく. 静脩 1964, 1(2): 4-5

ISSUE DATE:

1964-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36225>

RIGHT:

## 資料紹介

- **細川家本** 本年7月20日に、熊本市北岡にある細川家宝庫に収められていた漢籍類205部2,682冊が本館に寄託された。永青文庫理事長細川護貞氏は熊本藩主直裔の当主であり、今回寄託の図書も同家伝来の由緒あるものである。

図書の内訳は経書刊本を主とするものであって、中国のものは明版10部・清版16部、その他は日本の刊本類で、時代は江戸時代初期から明治時代初期にわたっている。いずれも斯学研究の好資料である外、藩学の事情をうかがう資料となるものであろう。

- **山田家本** 本年2月20日に山田一夫氏から「校正古語拾遺」以下305点750冊の図書が本館に寄託された。寄託者山田一夫氏は本学医学部出身で医学博士、現在京都府立医科大学名誉教授である。今回寄託された図書は博士の父祖の収集し、あるいは編述されたものの一括で、国文学を主とし、特に、宝徳3年(1450)の年記のある「千載和歌集」の筆写本などが目をひく。

- **松室家本** 本年2月20日に松室竜雄氏から松室本家日記及家記由緒14点が本館に寄託された。

現在の松尾神社の摂社月読社の創設は遠く顕宗天皇3年にさかのぼるが、松室家は創設以来累代この社の禰宣職を専掌し、遠祖には六条天皇の御生母も出した京洛社家中屈指の名門である。

今回寄託された文書類は上記松室家伝世の系譜、家記類および延宝3年から明治8年に至る日記等の集成である。これらは、松室家および月読社の歴史の変遷を伝える資料であるほか、有職故実の典故として、また近世の神社および神道史資料として価値あるものである。

## 本学への図書の寄贈つづく

## ■ 故丸岡健次君の収書農学部へ

故丸岡健次君は、昭和38年4月16日、全く突然に他界された。生前に農学部大学院ドクター・コースの2回生に在学中であった同君は、勉学の徒として学界からの期待も大きかっただけにその死が惜まれてならない。

このたび同君の御尊父丸岡秀氏は、その収書444冊を農学部農林経済図書室に寄贈されたが、その図書のどの1冊を手にしても丸岡君のありし日がしのばれる。

## ■ 復興途上の薬学部へ

昭和37年12月29日未明、火災により全焼した図書室の復興に日夜努力している薬学部へ内外の個人または会社より多数の図書の寄贈が続いている。この紙上をかりて感謝の意を表すとともに、寄贈者名および書名を以下に掲げる。

- Dr. W. T. Sumerford. (米国のミードジョンソン社研究所薬化学部門主任)  
Chemical Abstracts ; Vol. 15-57 (1921—1960)
- 石黒武雄 (京大名誉教授、第一製薬KK社長)  
薬学雑誌 (明37～昭33)  
日本化学総覧 1877～1961
- Dr. E. Schlittler (チバ製薬KK研究部長)  
Helvetica Chimica Acta ; Vol. 15-45 (1932—1962)  
TETRAHEDRON ; International Journal of Organic Chemistry,  
Vol. 15-18 (1961—1962)
- サンド薬品株式会社  
Helvetica Physiologica et Pharmacologica Acta ; Vol. 3—20 (1945—1962)

Experientia ; Vol. 1—18 (1945—1962)

- 日本レダリー株式会社

Journal of Colloid Science ; Vol. 1—17 (1946—1962)

Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics ;

Vol. 116—136 (1956—1962)

- 日本新薬株式会社

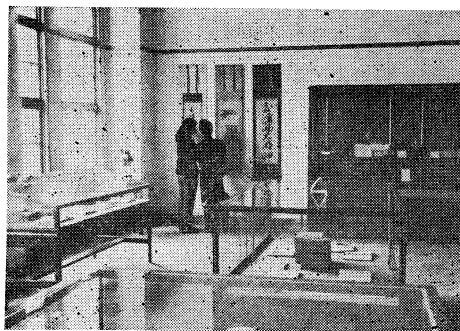
Liebig's Annalen der Chemie ; Bd. 357—628 (1907—1955)

- その他：東大薬学部，京大薬友会，九大薬学部，日本油脂，武田薬工，新三菱重工，台糖フェイザー，三共KK，丸善書店，吉岡書房，U. S. エシアティック・カンパニー，金原書店，京大化学研究所，乙卯研究所，日本ブラッドバンク

## 北村季吟 展 開 催

—読書週間始まる—

本年1月に新玉津島神社（下京区松原通丸丸南入玉津島町）から同神社宝物40点が本館に寄託されたので，これにちなんで，読書週間中の10月28日から3日間「北村季吟展」を開催した。陳列品は宝物中の季吟自筆「道の栄」「季吟日記」以下数点と，同神社保管中の宝物後水尾天皇宸筆玉津島大明神神号以下数点のほかに，館蔵の季吟著作刊本等を加えた。「道の栄」は同神社内北村季吟大人遺著刊行会からその第1集



として37年9月に初めて出版された珍籍であり，「季吟日記」も第2集として，38年11月に出版されたものであるが，これは旧重要美術品の指定を受けていたものである。

これらの宝物を本館に寄託されることになったのは，稠密の巷を避けて保管に万全を期したいという文化財保護の意味と，いまひとつには，学術研究の上に貢献したいという神社所在町内の方々の発議によるものである。

季吟が，和歌・俳諧の巨匠であり，それ以上に古典文芸注釈の碩学であったことは改めていうを要しないが，季吟と新玉津島神社の関係について一言する必要があるかと思う。新玉津島神社の現在位置は鎌倉時代初期の著名な歌人五条三位藤原俊成（定家の父）の旧邸内の一部であって，俊成はここに和歌三神のひとつである紀州和歌浦の玉津島明神を勧請して崇敬したところである。「源氏物語湖月抄」，「枕草紙春曙抄」，「八代集抄」等数々の名著を既に世に送り，季吟としては最後の注釈書である「万葉集拾穂抄」の筆を起して間もない天和3年2月（1683）60才の時，人のすすめにより社司としてここに来住し，元禄2年に幕府に召されて江戸に移住するまでの6年間を，この神社に過したのである。

館内めぐり

図書の出生届け

~~~~~

受入掛

~~~~~

京大の図書館にある本はもちろん，どの学部，どの研究室にある本も，京大での生活を始めることに決定したら，必ず通らなければならないのがこの受入掛だ。京大とひとくちにいても遠くは九州阿蘇の火山研究施設，北海道の釧路，白糠の演習林等のようにその名を冠した施設は，日本中に散在している。このような施設もふくめて，すべての京大